

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 VII



平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 VII

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 VII

平成九年三月三十日 印刷

平成九年三月三十日 発行

編集
発行

東京都文京区大塚五丁目三番十三号
平和祈念事業特別基金

印刷
株式会社
大成出版社

まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲者を銘記し、かつ、永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉の念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立されました。

当基金では、その業務の一環として、関係者の労苦に関する調査研究を実施しており、この「平和の礎——軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦——」はその成果を取りまとめたものです。

この業務の実施に当たり、当基金は、平成元年度から社団法人元軍人軍属短期在職者協力協会に、主として次の三つの観点から従軍体験者の手記の執筆あるいは聞き取り等により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託してきました。

- (一) 兵役と家族状況
- (二) 軍務・戦闘と意識
- (三) 復員後の生活と家族

同協会では、全国的に活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの体験記等を収集し整理の上、「恩給欠格者に係る労苦に関する調査研究報告書」として基金に報告がなされました。

報告された労苦記録の各篇には、各地で軍務に服し、過酷な戦闘体験を始めたとして、特に短期の軍務服役であるための様々な労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれています。

本書は、体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録であり、戦争の残虐さ、残酷さ、悲惨さ、その上いかに無意味なものであるか、翻って、平和がいかに尊いものであり、大切なものであるかを改めて教えてくれるものです。戦後五十年が経過し、戦後生まれが人口の三分の二を占め、戦争に関する意識の風化が進んでいるといわれる今日、軍人軍属短期在職者の労苦を徒労に終わらせないためにも、この労苦を子々孫々に語り継いでいくことが必要であり、そのためにも、この書は貴重なものと考えます。

最後に、調査研究に当たられた同協会関係者のご努力と多くの方々のご協力に感謝するとともに、本書が平和祈念の書としてたくさんの人に読まれ、平和の一助となることを願うものです。

平成九年三月

平和祈念事業特別基金

理事長 永山喜緑

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

VII

目次

まえがき

永山喜緑

第一部 労苦体験記

山西軍の悲劇 終戦後も戦う
お国のために戦った三年間
私の追録 入隊より復員まで

大山	盛男	75
井上	勝清	82
小池	隆重	87

〔南 方〕

使役に耐えた俘虜生活

二村	清	1
----	---	---

〔大 陸〕（満州）

終戦前後と内地生還までの記録

回顧録

ソ連軍越境参戦

岡本	隆男	5
吉田	文武	11
外山	浅一	25

〔大 陸〕（中支）

大東亜戦争参戦思い出の記

憶々戦争

小兵ものがたり

――山椒は小粒でぴりりと辛い――

応召、大作戦に参加、労苦の思い出

わたしが一番きれいだったとき

小野	清次	34
小林	詮一	42
都築	弥三彦	50
吉田	新一	65
土網	輝男	69

〔大 陸〕（南支）

南支派遣節兵団従軍記録

――南支派遣独立第六十六部隊――

高羽	正雄	100
----	----	-----

〔海 軍〕

上海海軍特別陸戦隊 断腸の終戦

北方・オホーツクの海は波荒く

武村	正男	107
佐久間	千鶴夫	112

〔その他〕

わたしはシベリアの捕虜だった

シベリア抑留生活のあらまし

東面	勝	116
横井	孝	120

第二部 聞き取り調査記録

〔南 方〕

血の匂う戎衣が兵の屍に

小船井	貞三	125
-----	----	-----

―震う手をもて薪を積み上ぐ―

第二師団歩兵第二十九連隊

命令受領者として

南洋の孤島 クサイエ島戦記

戦後五十年 忘れ得ぬ戦友の死

私の戦争体験記

濠北ハルマヘラ通信隊

砲・銃爆撃に耐えて

フィリピン・ルソン決戦

虎兵団の任務は終わった

ソロモン諸島コロバンガラ島

生き残りの強運

カロリン群島メレヨンの戦い

航測連隊に入営、航測手として

―南方方面転戦記―

印度支那駐屯軍衛生兵手記

幾度か死線を越えて

フィリピン第一三八兵站病院

内海 好八 131

山城 重次郎 140

佐々木 繁男 145

松本 久 150

羽田 徳栄 155

志村 登 161

佐々木 重利 169

今野 清次郎 183

鈴木 栄三郎 195

松塚 喜代隆 204

山崎 薫 210

〔大 陸〕（満州）

伝統に生きた工兵第十一連隊

戦争が私たちの青春だった

一粒の麦の尊さ

関東軍ノモンハン事件

阿爾山照空隊

満州での国境警備

終戦は台湾で憲兵隊

一兵士の従軍記 馬と鳩と共に

満州国境守備隊から 台湾防衛に

満州守備と銃後の護り・妹の死

〔大 陸〕（北支）

北支驚兵団歩兵第百十連隊

河南作戦の軽機射手

テレパシー

福井 一郎 217

酒井 清幸 227

谷川 源一 231

手塚 敏雄 239

金子 国雄 243

白川 仁三郎 251

桂川 保秀 257

神部 肇 263

伊藤 義雄 269

〔大 陸〕（中支）
輜重兵第三連隊警備小隊

中支第三師団の戦い

佐野 重信 273

支那事変初期

酷しい戦闘を生き抜く

私の軍隊体験

徴用軍属で漢口攻略

兵として対戦車特攻訓練

中支戦線従軍記

陸上勤務 第六十三中隊奮戦記

〔大 陸〕（南 支）

鉄道十二連隊 南部粵漢線打通

工兵第二七連隊（極部隊）

南部粵漢線撤退戦

わが軍隊生活と湘桂作戦

南支に戦って

上山 芳雄 279

斎藤 清人 284

西浦 久馬 287

相原 明 292

幅 一雄 298

石井 卓造 308

林 正作 314

白倉 丘 320

木下 照雄 329

毎日の砲爆撃に耐えぬいた

海軍第八一警備隊

海軍魂

秋山 力君 336

金田 安之 343

〔航 空〕

一練飛本土防空

航空特幹生の苦勞

航空整備兵の戦歴

佐野 岩男 348

大野 實 359

〔そ の 他〕

不拔の精神で苦しみに耐え生還

特攻基地、比島戦末期

戦犯未決収容所

遙かシベリアの空の下で

私の軍隊記・シベリア行き

郷党の模範となれ近歩第二連隊

船舶兵として千島勤務

昭和二十三年樺太抑留

キスカ島撤収作戦

北限の幌筈島守備

生き残った沖繩戦の初年兵

あ と が き

大内田 定夫 364

山本 春彦 367

久郷 直 373

出口 昌好 377

小林 仁平 384

諸田 幾男 388

鈴木 吉雄 393

後藤 半三郎 399

永山 清栄 403

南方

使役に耐えた俘虜生活

岐阜県 二村 清

勅旨で知り、悲愴な思いで拳を目頭にあて、憤慨し号泣したあの一時の惨めさが、いまだ脳裏から消え去ることはない五十年前の囚われの身の過去を臆げながら拾い、まとめてみた。

第十二期普通科練習生として横須賀久里浜海軍工作学校卒業、内地勤務を経てのある日、乗艦命令により海兵団に滞在、一週間余りで集結完了し、翌早朝門司沖に出航、護船団を伴い一路南下した。

台湾海峡を通過しマニラ沖に一船団を残し、南シナ

海に入るや爆撃に襲われ、我が艦艇の援護に当たった。初めての出会いに全員が驚きの体験をした。しばらくして、分隊士から巡洋艦後尾損傷により配置変更するの知らせがあった。そのころ、ボルネオ沖を航行中、再び馬來第三一海軍航空隊に配属になった旨の伝達を受け、二時間ほど経過した後、シンガポール沖に停泊、接岸上陸し、待機していた輸送トラックで到着した所がセクター飛行場の宿舎だった。

分隊士のこれからの作業情況、また戦況報告を受け、兵舎に所持品の整理を終え、直ちに作業に掛かった。一日の作業を終え、夕暮れの夜空に煌めく南十字星、南の国の情緒に肌身がジーンと幻想と感激に包まれ、目を閉じると走馬灯のごとく浮かぶ。辺りは平和な一孤島そのものである。

六カ月余り過ぎたある日、突如本隊の移動命令が出た。移動した所はゴム林の中で、大変な作業だった。

それを二日掛かりで終えることができたが、場所の關係で非常に不自由な生活の毎日だった。数カ月後、特攻機の出陣でまさに隊員の勇猛果敢な覚悟、その偉勲を偲び哀悼の意を表したい。

八月半ばの午前、突然分隊士の集合合図に隊員が口を揃えて何事かあるぞと、良からぬ噂を口々に騒がしくなった。部隊長の発声が半ば震え声で響いて聞こえたと同時に、あまりにも突如のことで悲惨な終戦勅書だった。

一瞬隊員は憤慨と興奮で我を忘れ騒然となり、半信半疑の状況だった。と同時にまるで打合せをしたように凄まじい爆音と共に飛来したジェット機。一度も見ただことのない飛行機が何回となく飛来し、ビラを撒き散らして行く。ただ茫然と眺め、何たることと哀れな光景を嘆き、直感的に先々までを案じた。

そうした一時が去ると早速、各分隊の武装解除と荒々しい発声音。所持品を纏め移動態勢に入る。しば

らくして分隊士から今後の行動の細かい説明があり、一時間ほどの後、ジュロン港に向け行進した。

ようやく湾口に到着。辺りは物々しい警戒に監視兵が自動小銃を向けて並び、四カ所ほどの検問所で慌ただしく検問を行っている。その側に大きく炎が燃え上がっている。検問が順次終わり順番がきた。荷物を台の上に広げた。すると手当たり次第、側の火の中に投げ込んでいく。何たることをするんだ、ほとんど荷物がなかったが一枚の毛布と写真が返された。その途端腕の時計を取り上げられた。本当に残念無念で悔しさで憤慨した。

検問が終わり、船内はこの出来事に騒然とし、騒がしく過ぎた。三時間余りがたち船は出航した。マラッカ海峡を北西に数時間過ぎたころ、錨が下ろされ、上陸の号令があった。みんな軽くなった荷物を持ち上陸し、目的地に向かって行進した。ようやく辿り着いた所は、バットバハのゴム林の立ち並ぶ広い場所だった。ここで我々が自活するよういわれた場所だ。全員到着した。各分隊の居住地割を終え、早速幕舎造りに掛か

り、椰子の葉を屋根に敷く。大わらわで作業が進んだが、作業が終わったのが夜半で、発電機一基を司令部に、他はローソクだった。

いつまで暮らすのか当てはない。野菜作りに畑を耕そう。作業分担で開耕する者と植え付けする者と、収穫を楽しむに毎日ひもじい生活が続いた。

それから十日余りしたある日、またもや英印司令部から指令がきた。それはビンタン島への要請だった。

約三十名ほどが先発隊として出発、無二の戦友もこれに同行したが、その後音信不通となった。それから二日後、指令の出たのがシンガポール内の復旧作業である。各作業隊員が決まり、司令からの訓示を受け、残留隊員に見送られ待機する。

作業隊はローリーに詰め込まれ南下した。二時間余り走ったところ、広場に停車し降ろされた。通訳の案内で十人ずつ中へ入って官職氏名を名乗るよう指示を受け、順次検閲を受けた。中に並ぶと将校と現地要人の子供たちが見つめる中で、戦犯ならぬ顔見実験だった。部隊には異常なく全員が終わり、再びローリーに乗せ

られ、走り出して二時間余りで到着し降ろされた所はジョホールバルで、ここで再度検問だったが、ここは形式だけですんだ。

また、車上の人となり、二時間ほど走って今度はチャンギーの小高い山の中腹に降ろされた。ここには既に数知れぬキャンプシートが山と積まれていた。各班ごとに居住域が決まる。早く幕舎を造って隊員は休養をとらねばならない。明日から復旧作業に支障を来すばかりか病人を出しては部隊全体に影響しかねない。ようやく出来上がった時は夜半の零時近く、当直を残して休息に着いたが、三時過ぎ起床し雑炊とカンパンで朝食を取り、点呼を取り出発した。

目的地へは徒歩で二時間余り、七時半ころまでに待機することになっている。現場から監視員二人と現地人が我々の前へきて作業の指示をした。監視兵の急ぎ立てる中で仕事は重労働だ。銃口で小突いたり、言葉が荒々しく厳しい作業で、なかなか止めさせようというない。

足元の暗さを見てようやく終わりを告げた。「オー

ケー、フィニッシュ、ゴーユークャンプ」何しろ毎日休憩もなくぶっ通しの作業のため、疲労と寝不足でキャンプに帰ればただ横になり寝たい。もちろん空腹もあるが疲れがひどい。みんな本当に音を上げてきた。だれも代わりがいるわけじゃない。歯を食い縛って我慢し、耐え忍んでやってきた。

二、三カ月経過した時点で体力の限界すら感じ、作業現場にも半ば虐待行為的な面もあるとして通訳を通して改善を要求して来たためか、追い迫い扱いも丁重になってきたようだった。中でも一番嫌われた作業は、三人ほどだが一般住宅の汚物のバケツでの回収であった。この汚物をアンモニア工場へ運ぶ仕事に悪臭がひどく、後部に乗っているためバナナの皮や石を投げつける者などがいて、感情的な問題など起き、みんな嫌った。

またキャンプから程近い所にチャンギー刑務所があり、この中の掃除をさせられ、広場の除草に何日も通ったが、これがまた汚物はもちろんのこと鉄索磨きまでやられた。キャンプに帰ると早速行水で体を洗っ

てから食事を取り、すぐ床に入るのが日課だった。しかしその後待遇は非常に良くなり、だんだん送迎までするようになり、隊員も飛び上がって喜び、活気を取り戻してきた。みんなの表情も明るくなり、助け合い励ましあった。

一年余りは早く去ったが、そのころは内地へ帰還の噂で持ち切りだった。実際に事実ならと、キャンプ内は大変な騒ぎとなり、ついに実現することとなった。待ち望んだ内地帰還命令がでる。特別要員を残し帰国準備の号令に沸き立った。

立つ鳥跡を濁さず、各班ともにシートを畳み、周囲の清掃を慌ただしく行い、全員異国に眠る御霊に黙禱し、故国に合掌をして名残を惜しみつつキャンプを後にした。

昭和二十二年九月、故国へ。

大陸（満州）

終戦前後と

内地生還までの記録

愛知県 岡本隆男

昭和十九年三月、召集を受け、四月、東京青山青年会館に集合、奉天第七五八九部隊（通信隊）に入隊。

昭和二十年七月、原隊を後に、所属中隊の尾曾曹長殿の副分任官の資格で、ソ満国境のチャムス方面の某地へ出張を命ぜられる。

任務は曹長殿が知るのみ。いずれ分かるだろうと聞きもしなかった。その日か翌日かは忘れたが、チャムスに着き、指定旅館に入る。

その翌朝、まだ明けやらぬ四時半ごろ、突然大きな爆発音に眠りを覚まされ飛び起きた。窓から国境方面を見ると、真つ赤な炎が上がり、飛行機の爆音に続き爆弾の破裂する音が二度三度と立て続けに轟いた。

咄嗟にソ連の参戦と判断された。曹長殿の指示により、服装を整え点検し階下へ駆け下り、女中に頼んで握り飯と白米を軍足に詰め込み玄関に出る。

曹長殿は清算を済ませ既に待たれていた。宿の人に声を掛け、駅へ急行する。曹長殿は一言「牡丹江の本隊に合流する」とだけ言われた。列車はすでに停車していた。客車は三両で後に長い貨車が連結していた。

発車後一時間ほど走行したとき、突然爆音がして、敵機の攻撃を受ける。列車は名も知らぬ駅へ急停車した。止まると同時に二、三両先の貨車へ爆弾が命中し

た。曹長殿の指示でホーム脇の溝に飛び込む。直撃された貨車には爆弾が積まれていたらしく、すさまじい爆発音とともに次々と爆発が続いて起こった。

激しい怒りが込み上げてきて思わず「この野郎、ふざけやがって」と怒鳴る。

どのくらい時間が経過したか覚えていないが、爆破が治まり曹長殿と一緒に起き上がりて周囲を見渡すと、それは無惨な有様で駅舎は屋根が吹き飛び、自分自身無傷でいられたことが不思議に思えた。

けが人が呻いていたので、手当をしなくてはと走り寄る。赤十字の腕章を付けた人と看護婦が走って来たので安心した。曹長殿はけが人を任し、私を促して改札口へ向かった。

鉄道に沿って道路が延び、軍用トラック群が南下していた。その内の一台に便乗し、積み荷の上に腰を下ろした。どのくらい走ったか、曲がりくねった丘の下り道で、敵機の襲撃があり、私たちの乗った車がカーブを曲がり切れずゆっくり横転した。はずみで、私たちは道路脇に放り出された。

その際は、荷物に尻の左側をはさまれ激痛を覚えた。痛さをこらえ起き上がると、曹長殿が「大丈夫か」と声をかけられた。「ハイ大丈夫であります」と答えた。激痛に耐えながら曹長殿に心配をかけまいと心に決めた。

運転手たちは、けがはないようだが、投げ出された荷物を茫然と眺めるだけで、私たちも手伝う術もないような状態であつた。運転手の一等兵は曹長殿に謝りながら「後の事はご心配なく、あの車に乗ってください」と言つて、後続の車を指定してくれた。曹長殿も素直にそれに応え、車の荷台に這い上がり車に身をまかせた。

ときどき爆発音がし爆音が轟いた。鉄路にそつた道路へ出ると駅が見えた。

辺りはすっかり夜になって灯火管制下で真つ暗になつていった。深夜に牡丹江に着く。

中隊長殿への報告が終わつた後、曹長殿にけがを打ち明けた。曹長殿は直ちに医務室へ連れていってくれ、深夜にも関わらず衛生兵に傷の手当を頼んでくれた。

血は止まっていたが、下着類は真っ赤に染まり、尻半分が青黒く変色していた。曹長殿は「よく我慢したなあ」と労りの言葉を掛けてくれたが「隠してはいけない」と叱られた。若い幹候の曹長殿を私は好きだった。一等兵のとき、当時の軍曹殿と撮った写真を、私は大切に内ポケットに入れていた。

翌朝点呼の後、部隊長殿以下部隊全員が集結していたことを知った。部隊の行動力の迅速さに内心舌を巻いた。

二、三日無為に過ぎたころ、だからともなく、「部隊全員がシベリヤへ抑留される」と言う噂が立った。対照的に「北鮮の白頭山の山麓に日本兵が集結している」と言う噂も伝わってきた。

将校三、四名と兵十名くらい、離隊して北鮮の日本軍に合流するが加わらないか、と誘いがあった。捕虜即恥辱と思っている私は、迷うことなくグループに参加した。その後、部隊長閣下から離隊の許可を得たことを聞かされた。

離隊行動は短時間で実行に移された。兵は背囊だけ

で帯剣は許されず、将校は佩刀^{はい}と胴乱及び双眼鏡だけで、食糧の持参は許可された。

翌朝九時、グループの指導者たちが部隊長閣下に離隊の挨拶を済ませ、隊伍を組んで堂々と部隊を離れ南へ向かった。隊を出てからは三、四人一組になり、人目を避け、森林を選んで進んだ。地形によつては昼間は仮眠し、夜、行軍した。一週間くらい経って開拓団にたどり着いた。

私は体調を崩していたためか、その夜発熱とひどい下痢症状を起こし、夜が明けても高熱で起き上がることもできなかった。しかし、グループは私を置いて出発した。一刻を争うグループの行動は理解できた。出発に際し声を掛けてくれたが、ただうなずくだけの自分が情けなかった。開拓団の人たちは、親切に看護してくれた。その後何日経ったか分からなかった。国民を守るべき身が逆に介抱されていた。そんな状態で開拓団は、満人の集団掠奪を受けた。目ぼしい物は持っていかれ、私も軍服、軍靴、背囊と無くなっていた。

悲惨な状況の中で幸い快方に向かい、十月半ばころ起き上がることができた。日ごとに力も付き、玉蜀黍の収穫にも、手伝いができるようになった。

必死で修得した通信技術も国のために生かすこともできず、懺悔の念は、絶えず自分を責めていた。別れて行ったグループに未練は残らなかった。今はどんな苦しみにも耐えて生還し、力一杯働くことが社会に尽くす道と考えるようになっていた。

開拓団と行動を共にするか、単独行動するかで迷ったが、これ以上迷惑を掛けることは許されず、辛くても単独行動に踏み切る以外にないと決心する。開拓団の人たちは引き止めたが、病気がりの私への労りが、ありありと感じられた。揺れる気持ちを振り切り、十一月末別れを告げ、大連を目指し歩き出した。満人の日本人に対する掠奪も無くなり、避難民としか映らない私には、危害を加えられる心配もなく、宿泊を乞えば、納屋などへ泊めてくれた。寒さに耐えられないときは、焚き火で暖を取り、つらい一週間が続いた。

そのような中で、ある日、朝鮮人老夫婦の家で一泊

させてもらった。粟餅の飯を御馳走になり、その美味しさは格別で、何より嬉しかったのは老夫婦の親切さが心の中に滲み込んで、思わず涙が出た。

別れを告げて再び歩き出したその日、鉄道の踏切に出た。偶然にも、遙か遠くから汽笛が聞こえ、列車が驚進して来た。私は人影も無いホームに立った。どうか、止まってくれ、と心に念じながら。

列車は止まった。満鉄の大連行きであった。ドアが開き満人ばかり十人ほど降りた。急いで飛び乗った。日も高い内に大連手前の国境で降ろされたが、運賃は取らなかった。あのまま歩いていたら恐らく十日はかかっていただろうに、まさに天祐と言うべきか。

地元の満人は日本語が話せた。話によれば昨日も日本人が二十人ほど越境したと言う。道順も紙に書いて教えてくれた。監視人も、いるかいなか分からないと言う。三時間は掛かるとも教えてくれ、今夜は月夜だから、できれば夜行が良いとも教えてくれた。

紙面の図を頼りに山越えにかかった。午後八時ごろだった。山道を辿って行くと案外早く山頂に出た。大